8Pへ

(1)

母の自画像

石坂洋次郎

（三十八）

2行分

世の中の物事は、私達の思惑だけで動いているものではなかった。中村と私が、二学期から東京に出る計画をすすめていると、中村の家庭には、私達を引き裂くために、策動をはじめていた。

中村の父は、その財力で実業界に、地方の政界では幅を利かせている人物だった。その頃は、政党政治の弊害が一番甚しい時代で、内閣が代ると、県知事をはじめ、主だった地方の役人は、全部更迭されるといった有様だった。そして、中立の立場にあるべき教育界にも、政党の圧力が及んでいたのである。

ある日、私は校長室に呼ばれた。内島校長は、[illegible]じしい嘘がつけない、ガッ[illegible]バラ